

# 難波渦

2008.7  
No.9

題字 浅野鈴秀氏（日本書芸院一科審査員）

## 文化遺産視察「長崎の文化遺産」

2008年2月28日（木）～3月1日（土）  
長崎県長崎市

昨年の韓国慶州への視察につづく2007年度の文化遺産視察の地は、長崎県長崎市周辺。現在、長崎県は、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」がUNESCOの世界遺産暫定リストに登録され（2007年1月）、さまざまな活動を展開している。長崎県の文化遺産の保存と活用についての取り組みを視察することが今回の目的である。

### 隠れキリシタンの里にたたずむ教会群—長崎市外海地区

快晴の伊丹空港を飛び立った私達は、1時間余りのフライトの後、長崎空港に到着。長崎県教育庁世界遺産登録推進室（以下、推進室）の大崎義郎氏・藤村誠氏にお出迎えいただき、バスに乗り込んだ。初日の日程は、推進室にコーディネートしていただき、遠藤周作『沈黙』の舞台とされる隠れキリシタンの里外海地区へ。40分ほどで車窓に映る風景は、切り立った断崖と陽光のきらめく紺碧の海に変わっていた。煉瓦造りの黒崎教会を車窓に見て、腹ごしらえの後、道の駅「夕陽が丘そとめ」に到着。長崎市教育委員会の森内敏和氏にお出迎えいただき、外海地区の文化的景観について説明を受けた。独特の景観を織り成す目の前の光景は、ロドリゴのように夜陰にまぎれてこの浜に上陸した司祭が少なくなかったことを想像させるのに十分であった。

ふたたびバスに乗り込み、バス一台が通るのにやっとの細道を大野教会に向かう。斜面にひっそりとたたずむ大野教会からは、教育委員会文化財課の小倉義弘氏にご案内いただく。1868年に来日したド・ロ神父が設計・指導し、1893年に完成した教会は、ド・ロ壁といわれる独特の構造主体で、今もなお大野地区の人びとの心のよりどころとなっているとのことである。教会見学後は、長崎市子ども博物館で、藤村氏による「外海・出津地区—景観と特徴」と題した長崎県の世界遺産登録への取り組みを、森内氏からは外海地区の概要や文化遺産についてレクチャーを受けた。

そろそろ陽も傾きかけてきた頃、旧出津救助院・出津

教会へ。一带は、出津文化村として整備され、それぞれを徒歩で見まわられる。旧出津救助院は、1897年にド・ロ神父によって創設された授産施設のうち、授産場・マカロニ工場・鯛網工場からなり、ド・ロ壁が美しい。鯛網工場の跡地は、ド・ロ神父記念館となり、ド・ロ神父がもたらした品々が展示されている。その内容は多岐にわたり、西洋のさまざまな技術をこの地にもたらした神父と人びとの交流が目に浮かぶようである。神父が持ってきたオルガンがまだ現役で活躍中であることも驚きであった。マカロニ工場跡地などは、現在修復工事中であったが、石垣や石垣などが当時を偲ばせた。出津教会は、この地区の強風を考慮した低平な外観ながら、威風堂々たる姿を誇っていた。尖塔上で両手を広げるキリスト像に、隠れキリシタンとして信仰を守り続けた人びとを包み込む包容力を感じた。

外海の家が夕焼けに染まり、枯松神社へと急いだ。伝道士バスチャンの師サンジュアン神父を祀った日本でも珍しいキリシタン神社として知られ、人目を憚るように雑木林の中にたたずむ。到底、バスが通れる道はなく、森内氏と小倉氏が何度も車を往復させてくださった。禁教時代にオラショの伝承が行われたとされる岩陰を見ると、これほどまでに人びとの心を支えた信仰の力とは何だったのかという疑問に駆られた。



出津教会を視察する

絵葉書のような外海の夕陽に見送られて、バスは長崎市内へ。長崎の食文化を知ること視察の目的であり、長崎といえば卓袱料理。推進室室長の嶋田孝弘氏と合流し、懇親会となった。卓袱料理の歴史やさまざまな作法をうかがい、目にも鮮やかなお料理を囲んで、夜が更けるまで、和やかな宴が続いた。

## 東洋と西洋の交差点—黄檗の寺々と西洋建築群

二日目は、長崎市内中心部をめぐるコースである。まずは、西坂の日本二十六聖人殉教地へ。バスを降りて坂道をあがると、1597年に二十六聖人が殉教した様を再現したオブジェが目飛び込んでくる。日本でのキリシタン弾圧の歴史はここから始まったのであり、世界的なキリスト教の聖地ともなっている。記念館には、殉教をめぐる生々しい史料が数多く展示されていた。前日に外海地区を見学していただけに、より一層、胸に迫るものがあった。バスに戻る足取りはやや重かったが、次の目的地に向かった。

長崎の伝統工芸品のひとつ鼈甲細工で有名な江崎べっ甲店に立ち寄り、眼鏡橋を見学した。ここからは「坂の町長崎」の起伏にとんだ地形を体感するべく徒歩での移動である。寺町界隈を散策し、日本に黄檗禅を伝えた隠元隆琦ゆかりの興福寺や赤い竜宮門で有名な崇福寺を見学。長崎には、キリスト教だけではなく、眼鏡橋など黄檗宗の僧侶によって伝えられた技術が今なお活かしていることを知る。

1866年創業の吉宗で昼食をとり、午後からは市内の南部をめぐる。しばらくバスに揺られた後、ふたたび徒歩での移動。オランダ坂や町並み保存地区に指定されている東山手地区を見学し、グラバー園へと向かう。グラバー園に隣接する大浦天主堂は、1864年の「信徒発見」の舞台である。ガイドさんの説明は、ドラマチックに感じられた。ド・ロ神父が建設に関わった旧羅典神学校を足早に見て、グラバー園を見学。16時に長崎港ターミナルを出航するマルベージャ号に乗船するため、駆け足での見学であったが、明治維新前夜に坂本竜馬らが活躍した旧グラバー邸に色鮮やかに咲くチューリップは印象的であった。

ガイドさんの時間配分のおかげで、なんとか16時出航に間に合い、マルベージャ号の汽笛の音とともに長崎港のクルージングとなった。筆者がかつて訪れた中国・上海もそうであったように、港町は海から眺めることによって、その町の特徴が理解できる。このクルージングでも、海から長崎の文化的景観を見学することが目的である。出航して間もなく、圧倒的な迫力で目に飛びこんでくる三菱重工業長崎造船所は、長崎が日本有数の港町であることを認識させる。隠れキリシタンの里神ノ島町

にたたずむ神の島教会や岸壁のマリア像はクルージングのクライマックスである。船首がふたたび長崎港ターミナルを目指すと、右舷からは、グラバー園や東山手の洋館群が一望できる。一時間余りのクルージングの後、マルベージャ号は長崎港ターミナルに接岸。少々ハードな二日目の日程を終えた。

三日目は、バス出発前に、藪田総括リーダーの案内で、希望者は唐人屋敷跡を見学。すぐさまバスに乗り込んで、出島へと向かった。近年の発掘調査の成果によって出島の復元は進み、出島での生活がどのようなものであったのかが一目でわかるようになっている。われわれ一行はここで一旦解散し、各自が自由に長崎市内を見学することになっていた。坂本竜馬ゆかりの地や、永井隆博士記念館のある如己堂などの原爆遺跡を見学する者、初日に訪れた外海地区をふたたび訪れて、初日には見学できなかった遠藤周作文学館を訪れる者など、それぞれの関心に仕がっての視察となった。夕方、長崎歴史文化博物館で集合し、館内を見学しながらそれぞれが今回の視察のまとめをして、長崎の文化遺産視察は無事終了した。

今回の視察を通して、世界遺産登録にむけての長崎の取り組みをはじめ、さまざまな刺激を受けた三日間となった。隠れキリシタンや黄檗禅については、残念ながら近年目立った研究は少ない。大阪にも高槻や茨木などにキリシタン遺跡が多く残されているし、長崎から江戸に向かう隠元はしばらく大坂に滞在していた。宇治の万福寺は有名であるが、大阪にも黄檗宗寺院が数多くある。長崎を訪れ、大阪の文化遺産についての課題を見出した視察であった。



長崎港クルージング

今回の視察にあたっては、長崎県教育庁世界遺産登録推進室に全面的な協力いただきました。三日間を通しての心温まるご配慮に、この場を借りて心より厚く御礼を申し上げます。

(P.D. 櫻木 潤)

# 「豊臣期大坂図屏風」ベルギーへゆく

## ベルギー、ルーヴェン・カトリック大学

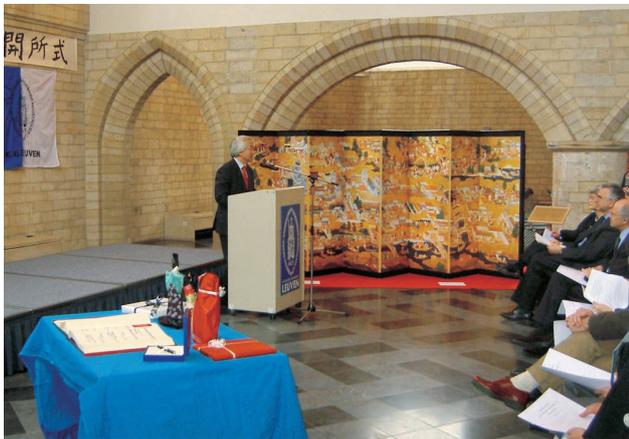
### 2008年3月10日(月)～12日(水)

2008年3月10日、関西大学がベルギーのルーヴェン・カトリック大学内に設立した、「関西大学日本・EU 研究センター」の開所式がおこなわれた。これと同時にルーヴェン・カトリック大学では、日本文化を理解するためのイベント「第1回 Japan Week」が開催された。このJapan Week では、日本映画の上映や、映画監督・山田洋次氏（関西大学客員教授）の対談、関西大学能楽部の公演とあわせて「豊臣期大坂図屏風」をめぐる学術フォーラムがおこなわれた。

当研究センターからは、学術フォーラムのために藪田貫氏（関西大学文学部教授・当センター総括リーダー）がベルギーへ渡り、また「豊臣期大坂図屏風」の高精細複製品を空輸・展示するために櫻木潤（当センター P.D.）と内田吉哉（同 R.A. [2008年3月時]）が随行した。

## 関西大学日本・EU 研究センター開所式

日本・EU 研究センターの開所式は、ルーヴェン・カトリック大学本部の大ホールでおこなわれた。式典にあたり、歴史の重みを感じさせる重厚な大ホールの中に「豊臣期大坂図屏風」が展示され、壁面には当センターの門幕が張り巡らされるなど、日本ムードが演出された。



日本・EU 研究センター開所式



学術フォーラムの様子

開所式では、関西大学の河田悌一学長とルーヴェン・カトリック大学のマルク・ベルペンヌ学長がスピーチをし、来賓として河村武和・欧州連合日本政府代表部大使と林梓・在ベルギー日本大使館大使が祝辞を述べた。センター開所に関する調印を終えたあと、能楽師・山本章弘氏による「高砂」が演じられた。

## 第1回 Japan Week 学術フォーラム

—「豊臣期大坂図屏風」をめぐる—

藪田 貫（関西大学文学部教授・センター総括リーダー）

『豊臣期大坂図屏風』とヨーロッパ

内田 吉哉（祭礼遺産研究プロジェクト R.A.）

『豊臣期大坂図屏風』を読む

3月11日に開催された学術フォーラム「—『豊臣期大坂図屏風』をめぐる—」では、藪田貫氏と内田吉哉が、それぞれ講演をおこなった。なお、内田の講演は、ルーヴェン・カトリック大学日本学教授ウイリー・ヴァンデワレ氏が通訳しつつ、適宜、補足説明を加えた。

藪田氏は、日欧交流の観点から、「豊臣期大坂図屏風」について語った。講演の冒頭で、2007年に日本国内で催された、屏風に関する展覧会を紹介し、また2007年に滋賀県安土町から派遣された調査団が、織田信長がローマ法王に贈ったと伝えられる「安土城図屏風」の調査をおこなったことに言及し、近年、日本で屏風への関心が高まっていることを述べた。その後「豊臣期大坂図屏風」を所蔵するエッゲンベルク城博物館の来歴を説明しつつ、現在までの共同研究の成果として、この屏風がヨーロッパへ渡った年代を17世紀後半から18世紀にかけての時期とする説が出されていることを紹介した。

内田は、「豊臣期大坂図屏風」に描かれる事物・景観に関する講演をおこなった。屏風の画面が、大きく3場面に区分されることを説明し、続いて各場面を解説した。内田は最後に、この「豊臣期大坂図屏風」の特質として、平和に繁栄する豊臣期の大阪を描いた点こそが、この屏風の最大の価値だとして講演を締めくくった。

（特別任用研究員 内田 吉哉）



フォーラムの合間に屏風に見入る

## 第6回レクチャーシリーズ 『豊臣期大坂城を掘る』

会場：なにわ・大阪文化遺産学研究中心

2008年1月16日(水)

2007年度からセンターが特別プロジェクトとして取り組んでいるオーストリア・グラーツ市エッゲンベルク城博物館所蔵の「豊臣期大坂図屏風」には、豊臣時代の城下町の様子と大坂城の様子が描かれている。近年の発掘調査の成果は、大坂城下町の様子を次第に明らかにしている。

第6回 NOCHS レクチャーシリーズは、長年にわたって大坂城下町の発掘に携わってこられた大阪城天守閣の松尾信裕氏と、「豊臣家最後の晩餐」として話題になった大坂城三ノ丸北辺の発掘を担当された(財)大阪市文化財協会の杉本厚典氏を迎えて、「豊臣期大坂城を掘る」をテーマに開催した。当日の参加者は48名であった。

### 松尾 信裕氏 (大阪城天守閣館長)

#### 「豊臣期大坂の景観」

松尾氏は、豊臣時代の城下町について、5つの段階にわけて論じた。大坂城前夜には、中世大坂三都の時代として、四天王寺門前町・渡辺津・大坂寺内町が存在していた。天正11年(1583)の大坂築城に際しては、本願寺の跡地に城郭を築くとともに、城下町においても、四天王寺までの南北平野町城下町を建設し、既存の中世都市である四天王寺や渡辺津を取り込んでいった。これは安土城築城の際の手法と共通するという。

天正14年(1586)に二ノ丸の工事に着手するにおよび、城域と城下町は拡大する。東横堀川や、幅40～50m、深さ10m以上という巨大な空堀の惣構堀が開削されたのはこの時期である。慶長3年(1598)に三ノ丸が建設され、秀頼の時代になって、大坂城と城下町は最盛期を迎え、巨大近世都市が出現する。船場地域に新たな城下町を建設し、上町台地の脊梁線上に武家屋敷が、西側斜面から船場地域に町屋が広がるという景観を呈す



左：松尾 信裕氏 右：杉本 厚典氏

ようになるのだ。出土する陶磁器類も秀吉期に比べて、秀頼期のものが華やかであるとのことである。二度にわたる大坂の陣で豊臣期大坂城は灰燼に帰してしまうが、城下町は、船場地区では豊臣期の町通をほぼ踏襲し、上町地区では改変されていることが発掘調査から明らかとなっている。堀川が開削され、豊臣期の町人地がさらに拡大し、大坂は商工業都市へと変容。現在へと継承されている。

長年にわたって大坂城下町の発掘調査に取り組んでこられた松尾氏ならではの詳細なデータの蓄積による分析は簡明であり、豊臣期大坂城下町だけではなく、古代・中世から近世に至る大坂の成り立ちを考える上で、非常に示唆的な講演であった。

### 杉本 厚典氏 ((財)大阪市文化財協会文化財研究部学芸員)

#### 「大坂城三ノ丸北辺の発掘調査から」

つづいて、2007年11月に「豊臣家最後の晩餐」として話題になった大坂城三ノ丸北辺の発掘調査の最新成果について、杉本氏よりご報告いただいた。まず、同地区のこれまでの調査について触れ、今回の調査地について説明があった。今回の調査地は、大阪市中央区大手前1丁目の追手門学院中・高等部敷地内の上町筋に面する辺りである。金箔押し瓦が出土した豊臣前期(1581～1598：本願寺焼亡から三ノ丸築造まで)の地層に、三ノ丸造成時の厚い盛土層があり、その上に豊臣後期(1598～1615)の生活面がある。その面に、陶磁器や漆器、動物骨や魚骨の多く入った土壌が検出された。陶磁器には、志野焼や唐津焼、備前焼などの国産陶器が、魚骨には、タイやボラ、シイラなどが含まれていた。

興味深いのは、同じ土壌から、平均24.7cmの大量の箸が出土したことである。こうしたことから、「豊臣家最後の…」との記事につながったのであろうが、杉本氏によると、「最後」ということではなく、もう少し時期が遡って秀頼治世下で穏やかな頃の遺物であろうとのことであった。また、陶磁器は、豊臣前期の層で出土したものと豊臣後期のそれとを比較した場合、明らかに後期のものの方が、華やかで技巧をこらしたものであった。松尾氏の内容とも通じ、これまで秀吉は派手好きで、桃山文化は秀吉の頃が最盛期であったとされてきたが、むしろ秀頼期の方が華やかさを増していたようである。わずか数年ではあるが秀頼の時代について再検討する余地があることを、杉本氏のご報告を通して感じさせられた。

(P.D. 櫻木 潤)

## 第4回ワークショップ 「なにわの伝統野菜交流会」

会場：関西大学天六キャンパス有鄰館

2008年2月16日（土）

2008年2月16日（土）、第4回ワークショップ「なにわの伝統野菜交流会」を開催した。今回のワークショップは、なにわの伝統野菜を授業で取り上げて精力的に活動している学校の先生方（主に小学校）と、伝統野菜の保存会などで活動されている方々を招いての交流会をもった。前半では各学校での取り組みの様子を紹介していただき、後半は伝統野菜の保存にに取り組む方々をゲストに加えての懇談会をおこなった。

### 〔参加報告者〕

大阪市立扇町小学校（志村先生）  
大阪市立北恩加島小学校（土井先生）  
大阪市立港晴小学校（竹下先生）  
大阪市立鷺洲小学校（古田校長先生）  
大阪市立住吉小学校（川口先生）  
大阪市立千本小学校（須摩先生、石井先生）  
大阪市立中央小学校（山北先生）  
大阪市立丸山小学校（松本校長先生）  
大阪府立清水谷高等学校（岡本先生）  
久保 功氏（野菜文化史研究センター所長）  
宮元 正博（当センター R.A.）

### 〔ゲスト〕

石橋 明吉氏（なにわの伝統野菜研究所）  
谷 福江氏（田辺大根ふやしたろう会）  
難波 りんご氏（天王寺蕪の会）  
岡田 明寛氏（豊下製菓株式会社）

交流会では、まず各学校での児童の取り組み方や野菜に対する認識の変化、成果発表のようすなど、現状と課題を報告していただいた。扇町小学校の志村先生は絵本として出版された『大阪なにわ伝統野菜のおはなし』（内外出版）の紙芝居を口演された。

たまつくりくろもんじろうり  
玉造黒門越瓜のクッキーを作った大阪府立清水谷高等学校の岡本先生からは、クッキーの製品化を通じて生徒たちが町に興味を持つようになったという話をしていただいた。久保功氏には京野菜と学校教育についてのコメントをいただいた。また、宮元はセンターでの取り組み（なにわの文化遺産として野菜を取り上げた講演、実験農園での栽培など）について説明した。

各学校の報告をまとめると、伝統野菜を栽培すること

のきっかけは、大阪市立の小学校で「大阪らしさ」を学習内容に盛り込む必要があることが大きな理由となっているようである。大阪らしい素材としてなにわの伝統野菜に注目し、植物栽培の教材として用いていることや、食育の観点から野菜を自分たちで栽培・収穫することを目的にしていることが述べられた。問題点としては種の入手方法や学習園のスペースの問題、費用についてなどがあげられたが、各校の担当者やPTAが工夫を凝らして野菜栽培に当たっていることが分かった。

これまで各校が独自におこなってきたことが、この交流会を通じて情報の共有化がおこなわれ、また伝統野菜の保存会の方々とも交流を持たせたことで入手方法や栽培方法についての情報を得られたのではないだろうか。閉会後も各校の先生方が交流をしておられた様子を見る限り、今回のワークショップを開催した意義は果たせたようである。

当センターではなにわの伝統野菜を文化遺産ととらえており、なにわの伝統野菜の歴史的・文化的背景を調査し、広報していきたいと考えている。各学校の報告からも、なにわの伝統野菜は多角的で、学問的な広がり期待できる素材であり、学校で取り上げることで児童や保護者、地域に広がっていくことが確認できた。

（生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 影山 陽子）



交流会の様子



久保 功氏

## 研究室だより

### 2007年度 第2回生活文化遺産研究例会

吉田 豊氏 (堺市博物館学芸員)

「天下の台所・大阪の産業」

宮元 正博 (生活文化遺産研究プロジェクト R.A.)

「錫器の製作工程－大阪錫器を例に－」

2007年12月18日 (火)

今回の例会では、大阪の産業にスポットを当てた報告を行なった。

吉田氏は、近世大阪の産業の実態について、詳細な資料を用いて解説した。正徳4年(1714)移出品表では移出品に対して移入品が3倍近くあり、大阪は消費都市であったとされてきた。しかし大阪の産業の特徴は天下の台所という言い方がされるように、生活必需品を生み出していくことに特徴があったと考えられる。大阪に入ってくる原材料を大阪の間屋が引き取ればプラスマイナス0になるが、産地間屋が直接売ることも多い。また店の数が多いからといって、そこで製作しているわけではなく販売のみの店も多くなっていくため、統計や職人の一覧を見て単純に大阪は消費都市であるとは言えない、と述べた。また、天下の台所という言葉の由来についても述べられた。



吉田 豊氏



宮元 正博(当センターR.A.)

宮元は、吉田晶子氏(当センター研究員)とともにまとめた『なにわ・大阪文化遺産学叢書8 大阪の伝統工芸－茶湯釜と大阪浪華錫器－』の成果の一部である錫器の製作工程(鑄型、鑄込み、ロクロ、焼き合わせ、絵付け・クサラシ、中仕事)について、大阪錫器株式会社を例に、写真を交えて詳しく解説した。大阪錫器株式会社では伝統技法を受け継ぎながらも、新たな手法を取り入れたりこれまでにない製品も製作している。またベテラン職人から若手への技術継承が行われている。

会の最後には、センター1階にある保存処理分析作業室の作業報告「保存処理分析作業室報告－鉄器の保存処理－」を千葉太朗(生活文化遺産研究プロジェクト R.A.)が、「保存処理分析作業室報告－考古遺跡の分析学的研究－」を影山陽子(同 R.A.)が行った。

(生活文化遺産研究プロジェクト R.A. 影山 陽子)

### 2007年度第2回祭礼遺産研究例会

和住 香織氏 (関西大学大学院博士課程前期課程)

「明治後期の大阪と神社合祀」

コメンテーター・大谷 渡 (関西大学文学部教授・センター研究員)

2008年1月18日 (金)

なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、研究構想の一つに若手研究者の育成があり、その中には大学院生の修士論文・博士論文執筆の支援も含まれている。祭礼遺産研究プロジェクトでは、明治時代後期の大阪における神社合祀の調査をおこなっているが、その調査活動において、大学院生の和住氏を調査員として起用してきた。和住氏は、当センターでの調査活動を、自身の研究テーマにフィードバックさせ、2008年1月に修士論文を提出した。

そこで、2007年度の第2回祭礼遺産研究例会では、和住氏に、修士論文を基調とした発表をしていただいた。研究例会当日は、和住氏の指導教授である大谷渡氏(関西大学文学部教授・当センター研究員)をコメンテーターとして迎えた。

和住氏は、明治39年(1906)以降に大阪でおこな



和住 香織氏

われた神社合祀の実態を研究するに当たって、先行研究は概要を把握する程度に留まっていることに言及した。和住氏は、この問題について個々の具体例を明らかにするために、大阪の神社および神社合祀に関する新聞記事をもとにした調査を実施した。

調査の結果、和住氏は神社合祀に関する新聞記事の中から、特徴的な事例をピックアップした。さらに、それらの事例を、①合祀の結果、廃絶した神社と残された神社の事例、②合祀を含む神社政策の中で「迷信」と位置づけられた事例、③市電の開通など、大阪の近代化にもなって移転した事例、の3種に分類し、それぞれに検証を加えた。

報告後には、コメンテーター大谷氏から、和住氏の研究について批評がなされた。和住氏の研究の今後の課題として、大阪府庁に所蔵される、神社行政資料『神社明細帳』の分析などが提議された。

(特別任用研究員 内田 吉哉)

## 2007年度第2回歴史資料遺産・学芸遺産研究例会

2007年1月22日(火)

明尾 圭造氏(芦屋市立美術博物館・センター研究員)

### 「大阪画壇の評価基準～菅桶彦を中心に～」

明尾氏は、大阪の地で画家として活躍した菅桶彦(1878～1963)を通して、大阪画壇の評価基準について研究報告を行った。

菅桶彦は、明治11年(1878)に鳥取県に生まれ、幼い頃、父とともに大阪に移住した。父盛南が病気で倒れた後は、特定の師につくことなく、独学で絵画を研究した。さらに漢学や国学・有職故実の修養も積んだ。幼い頃から大阪で過ごした桶彦は、浪華の風俗を描く町絵師として「浪速御民」を標榜するなど、独自のスタイルを確立した。昭和33年、日本画家として初めての日本芸術院恩賜賞を受賞し、同37年には大阪名誉市民となっている。その翌年に大阪市で逝去。享年85歳であった。

報告では、横山大観や竹内栖鳳をはじめとする東京や京都の画壇とは異なった評価基準を大阪画壇に与えるべ

きだ、と主張された。儒学・国学の伝統を再確認するとともに、美術史や歴史学などの連携をもとに、大阪画壇を紐解いていく必要性が提起された。美術史的な公募展史と画壇の変遷のみではない別の角度からの視野が必要であり、菅桶彦の研究がその分水嶺となることが述べられた。

(歴史資料遺産研究プロジェクト R.A. 松永 友和)

古川 武志氏(大阪市史料調査会)

### 「南木芳太郎と『上方』について」

大正14年(1925)4月1日、大阪市は西成郡・東成郡を市域に編入し、日本最大・世界第6位の人口を抱えることとなった。さらに都市基盤が整備され、街の様相が激変した。いわゆる「大大阪」の成立である。この「大大阪」の成立は、人びとの生活や文化、思想に大きな影響を与えた。

その中でも郷土史家・南木芳太郎が受けた衝撃は大変なものだったのであろう。彼は「大大阪」の成立に伴って消えゆく名所旧跡や文化・芸術を目の当たりにし、「せめて保存に務めたい、そして記録に留めておきたい」という使命感を抱き、昭和6年1月、雑誌『上方』を創刊したのである。

『上方』は表紙が長谷川貞信(2世、3世)。原稿は南木をはじめ谷崎潤一郎や織田作之助、食満南北ら錚錚たる面々が執筆している。「南木文庫」などを通じて、人びとと図っていた交流の有様が『上方』の紙面からうかがえる。

近年市町村合併が進み、地方を取りまく状況も目まぐるしく変化している。われわれは時時刻刻と変化する情勢を記録し、評価した上で後世に残していく必要がある。また大阪では趣味人たちによるサークル活動が必要不可欠であるが、現代においては衰退している。大阪が「大大阪」へと変貌していくさなか、南木芳太郎が創刊した『上方』には、大阪が復権するためのヒントが詰まっている。

(学芸遺産研究プロジェクト非常勤研究員 松本 望)



明尾 圭造氏



古川 武志氏

## 新刊紹介

なにわ・大阪文化遺産学叢書 5

「大坂代官 竹垣直道日記(二)」

A5版・縦書き・338p

2008年1月31日

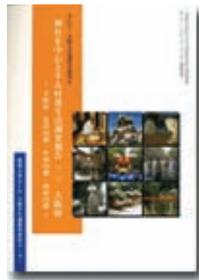


なにわ・大阪文化遺産学叢書 6

「神社を中心とする村落生活調査報告(二)」

B5版・縦書き・240p

2008年3月14日



なにわ・大阪文化遺産学叢書 7

「木崎愛吉旧蔵本山コレクション金石文拓本選」

A4版・縦書き・カラー図版16p + 135p

2008年3月31日



なにわ・大阪文化遺産学叢書 8

「大阪の伝統工芸—茶湯釜と浪速錫器—」

A4版・横書き・カラー図版16p + 94p

2008年3月31日



## 新任者紹介

今年度より、新たに着任した研究員・研究協力者は以下の通り。その他、研究プロジェクト間で若干の研究員の異動があった。

また、昨年度までR.A.として任用されていたスタッフが、雇用規定により退任し、非常勤研究員となった。それにともない、新規に4名がR.A.として採用された。前年度まで祭礼遺産研究プロジェクトにてR.A.として勤務していた内田吉哉は、今年度より特別任用研究員として、引き続きセンターに勤務することになった。

### 研究員・研究協力者

森下 正博(生活文化遺産研究プロジェクト)

李 熙連伊(生活文化遺産研究プロジェクト)

森本 幾子(生活文化遺産研究プロジェクト)

(前年度まで、当センターP.D.)

西田 孝司(歴史資料遺産研究プロジェクト)

### 非常勤研究員

内海 寧子(祭礼遺産研究プロジェクト)

千葉 太朗(生活文化遺産研究プロジェクト)

宮元 正博(生活文化遺産研究プロジェクト)

松本 望(学芸遺産研究プロジェクト)

### センターのスタッフ

内田 吉哉(特別任用研究員)

(前年度まで、祭礼遺産研究プロジェクトR.A.)

藤岡 真衣(祭礼遺産研究プロジェクトR.A.)

和住 香織(祭礼遺産研究プロジェクトR.A.)

石本 倫子(生活文化遺産研究プロジェクトR.A.)

中尾 和昇(学芸遺産研究プロジェクトR.A.)

## 編集後記

新任者紹介の記事にもあるように、今年度より大幅に当センターのP.D.、R.A.が入れ替わりました。非常勤研究員となった元R.A.の面々は、さすがにセンター設立以来の修羅場をくぐってきただけに一騎当千の猛者ぞろいで、彼・彼女らが抜けた穴は大きなものがあります。

とはいえ、新任R.A.もやる気にあふれたメンバーがそろっていますので、今年度前半の研究行事を乗り切れば、新生なにわ・大阪文化遺産学研究センターはまた一味違う成果が出せると思います。

(特別任用研究員 内田 吉哉)

文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業  
オープン・リサーチ・センター整備事業(平成17年度～21年度)  
なにわ・大阪文化遺産の総合人文的研究

## 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

News Letter 「なにわがた  
難波湯No.9」

発行日 2008年7月15日

発行所 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

発行者 高橋隆博

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL 06(6368)0095 Fax 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/home.htm>

E-mail [naniwa@jm.kansai-u.ac.jp](mailto:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp)

印刷所・編集協力 (株) 廣済堂